（様式第1号）

研究No.（記載不要）	17 ―文学― 6

平成17年度配分　研究成果の概要

研究名	石子順造の批評について				
配分を受けた特別研究費	文化政策学部長 特別研究費　800 千円				
研究者氏名（代表者）	学部名	学科名	職	氏　名	共同研究の場合の分担
	文化政策	芸術文化	教授	尾野正晴	
共同研究者					

発表の方法（予定で可）	1 紀要	号数	第　　号（　年　月発行）
	2 学会等での発表 学会等名：	発表日（発表予定日）	平成　年　月　日
	③ その他 発表の方法： 「幻能」展図録 国立国際美術館ニュース	発表日（発表予定日）	平成17年6/10月　日

注：配分を受けた翌年度の6月末までに提出

（研究の目的等）

石子順造（1928～77）は、静岡の民間会社に一時在職した後、上京して美術批評をはじめた異能の人である。彼は、多くの美術家たちと交わり、競うように自らの論を進めてきたが、今回の研究は、「トリックス・アンド・ヴィジョン」、「幻触」に続く一連の特別研究の総仕上げであり、石子の先駆的な批評の問題点を明らかにすることが目的である。

（研究の実施方法等）

1　石子の論考（3巻の著作集に収録されているものを除く）を可能なかぎり収集する。雑誌などの資料のうち、入手可能なものは購入し、不可能なものはコピーをとる。

2　静岡周辺には、石子を知る関係者が少なくない。可能なかぎり多くの関係者に面会して、石子に関する証言を収集する。収集したさまざまな資料は、整理したうえで分析する。一例として、静岡の「虹の美術館」（現在は閉館）館長の本阿弥氏と協力して、石子に関する関係者の詳細なインタビューを行った。

（得られた成果等）

昨年、石子と「幻触」に関する重要な展覧会がふたつ開催された。ひとつは、6～8月に鎌倉画廊で開催された「幻触」の回顧展、もうひとつは、10～12月に国立国際美術館（大阪）で開催された「もの派－再考」展である。いうまでもなく、石子が生み落とした「幻触」は、「もの派」の母体となった美術運動だが、今回の特別研究の成果は、「幻触」展図録の執筆および編集と、「もの派－再考」展に関連した論考「幻触とは何か」（『国立国際美術館ニュース』150号）に結実している。なお、「幻触」展図録は、全国の主な美術館に送付した。